

第 12 回

ネパール口唇口蓋裂手術医療チーム派遣事業

報告書



2006年11月12日(日)～11月28日(火)

ネパール カブレ郡 シーア記念病院



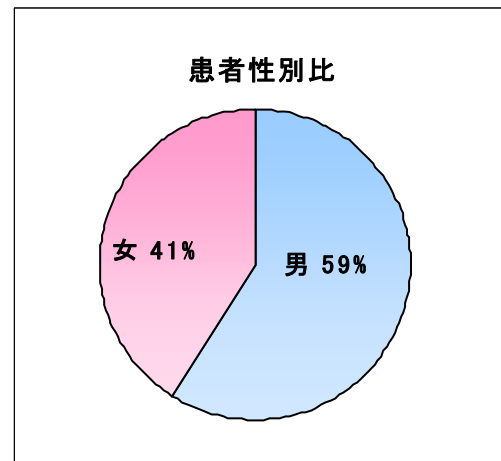
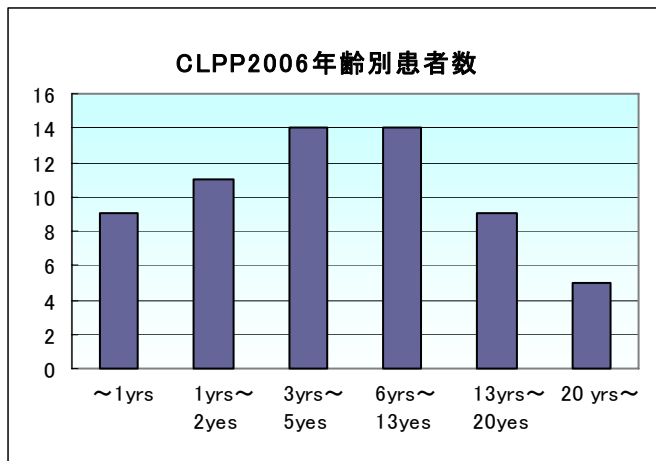
1. 背景と趣旨 治療の機会が極めて限られているネパールの口唇口蓋裂の患者に対し、日本とネパールの医療従事者が協働で口唇口蓋裂患者への治療から看護までを提供する活動を行い、
 - それぞれの患者の失われた「人間としての尊厳」を回復する
 - ネパールの口唇口蓋裂患者のために現地人による治療の機会を広げる
 - 日本にいる個人・企業の国際協力への理解を深める
2. 派遣期間 2006 年 11 月 12 日～2006 年 11 月 28 日
3. 事業実施機関 特定非営利活動法人 ADRA Japan (理事長 曾根田健二)
4. 実施協力団体 ADRA Nepal およびシーア記念病院
5. 実施場所 ネパール国カブレ郡バネパ市 シーア記念病院
6. 患者数 受診患者数 65 人、治療患者数 62 人、手術 64 件(同一患者の複数手術のため)

内訳

口唇口蓋裂	61 件	臀部の癒痕	1 件	その他形成手術	1 件
埋没陰茎	1 件	鼻の癒痕	1 件		

*受診した 65 人のうち、3 人は後述の理由により手術を行わなかった。1 人は、症例が口蓋部分のくぼみのみだったため、手術の必要はないと判断された。もう 1 人は術前検診時に熱があり、小児科を受診し薬も投与されたが解熱せず、検査データも悪かったため手術を中止とした。術前検診で心室中隔欠損(心エコーで確認)のあった子供は、麻酔をかけてから血中酸素濃度があがらなかったため手術を中止した。また、手術を行った患者のうち 1 人には、臀部の癒痕と鼻の癒痕の 2 箇所手術を行なった。また、口蓋裂患者のうち 1 人は舌弁の手術を 2 回行なった。鼻の奇形と埋没陰茎の症状があった患者は、今回は埋没陰茎の手術のみを行った。結果、62 名が実際に手術を受け、手術件数は 64 件となった。また、術前検診を受けていない頭部皮膚腫瘍男性の要請を受けて、別途、局所麻酔手術を 1 件行った。

7. 患者層 患者の年齢層および、性別比は以下のグラフのとおり



8. 医療チーム構成 合計 34 人
構成

形成外科医	8 人	臨床工学技師	1 人	医療コーディネーター	2 人
麻酔科医	5 人	栄養士	1 人	ADRA スタッフ	4 人
看護師	11 人	薬剤師	1 人	インターン	1 人

(前半参加 11 月 12 日～11 月 18 日・後半参加 11 月 19 日～11 月 25 日)

9. 派遣協力元 (敬称略 50 音順)

- | | |
|----------------|----------------|
| 熊本リハビリテーション病院 | 千葉県がんセンター |
| 国立病院機構千葉医療センター | 千葉大学医学部付属病院 |
| 昭和大学横浜市北部病院 | 帝京大学ちば総合医療センター |
| 昭和大学医学部 | 豊見城中央病院 |
| 昭和大学病院 | 星ヶ丘厚生年金病院 |
| 東京衛生病院 | 嬉野医療センター |
| 東京女子医科大学 | |
- 東京女子医科大学と東京衛生病院は医療コーディネーターも派遣

10. 予算

1,200 万円

資金源: 協賛企業寄付金、プロジェクト指定寄付金、事業参加費、一般寄付金、自己資金

11. 協賛企業 (敬称略 順不同)

- | | |
|------------------|-----------------------|
| 東京エア・ウォーター株式会社 | 株式会社 田中三誠堂 |
| 株式会社ベアーマディック | 泉工医科工業株式会社 |
| タイコヘルスケアジャパン株式会社 | スリーエム ヘルスケア株式会社 |
| 東レ・メディカル株式会社 | ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 |
| テルモ株式会社 | 株式会社 大塚製薬工場 |
| 丸石製薬株式会社 | カーディナルヘルス・ジャパン228株式会社 |

12. 決算報告書 2007 年 4 月より公開予定

13. 年間活動報告

事前準備段階	
3 月～11 月	<p>患者の探索依頼・受け入れ</p> <ul style="list-style-type: none"> 現地実施協力団体である ADRA Nepal がネパール各地に存在する NGO や行政と連携し、その地域に暮らす口唇口蓋裂患者を探索した。時期が合い、家族の合意が取れた患者に対して、定められた時期に ADRA Nepal が交通や宿泊を手配し、シーア記念病院への受け入れを調整した。
5 月	<p>医療専門家と ADRA Japan スタッフによる現地での事前調査・調整</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本人医療専門家のリーダー 2 名と ADRA Japan のスタッフ 3 名が新しく事業実施協力団体に加わるシーア記念病院を視察し、事業実施協力団体 2 つとネパール医療関係者を含め、連携体制の確立のため調整を行った。
6 月	<p>医療ボランティア募集</p> <ul style="list-style-type: none"> 過去の協力病院ならびに過去の参加者への連絡、および ADRA Japan のホームページ、ニュースレターを通して、事業実施の告知とボランティアの募集をおこなった。
7 月	<p>医療ボランティア応募者に対する説明会および面接</p> <ul style="list-style-type: none"> 初めての応募者に対しては、現地での活動や治安状況について詳しく説明し、参加の意思を再確認する時間を設けた。また、面接をすることによって、その人の能力等をある程度把握することで、現地での活動をより具体的に意識しながら準備を進めることが出来るようになった。
8 月	<p>医療ボランティア派遣者決定、ネパールにおける医師・看護師登録準備</p> <ul style="list-style-type: none"> 医療コーディネーターによる選考を経て、派遣決定者に連絡および、所属病院へ対する招聘依頼を提出した。また、ネパールで医療行為に従事するためには、現地での医師・看護師登録が義務付けられているため、必要書類(学歴証明書、英文医師・看護師免許等)の手配を開始した。
9 月	<p>ADRA Nepal の医療コーディネーターを 9 月に日本に招聘</p> <ul style="list-style-type: none"> 過去 11 回までに支援を受けた主だった助成団体・寄付者へ表敬訪問し、現地の様子を報告した。また、日本の医療事情を理解することを目的とした医療施設の見学やこれまでの参加者と

	交流する場を設けることで、今後のより良好な信頼関係の構築を図った。
10 月	医療チーム事前顔合わせ <ul style="list-style-type: none"> 現地での活動について打ち合わせを行った。
本事業期間	
11 月 10 日	日本人医療専門家担当者とADRA Japanスタッフが現地に着し設営
11 月 12 日	日本人医療チーム本隊到着 <ul style="list-style-type: none"> 参加者に対する事前アンケートを実施した。
11 月 13 日	術前検診 <ul style="list-style-type: none"> 受診患者総数は 65 名であった。
11 月 14 日 ～ 11 月 23 日	<p>日本・ネパール協働手術・看護</p> <ul style="list-style-type: none"> ネパール人の手術室スタッフ、看護師と協働で手術と看護にあたった。患者は術前と術後の抜糸を含め、約 2 週間滞在した。医療費に加え、患者と家族の移動交通費、滞在費、食費は ADRA Japan が負担した。 <p>臨床工学技師による医療機器などの整備技術の移転</p> <ul style="list-style-type: none"> ネパールの病院では技師が限られた資源の中で、最大限の工夫をして、医療機器の長期利用を試みているが、反面、無理をして使い余計に故障を招く状況が発生してきた。また、外国からの援助でもらうけた医療機器の整備・修理方法がわからず、故障したまま放置された機器が多数保管されてあった。そこで、日本の臨床工学技師がシーア記念病院を中心とするネパールの病院の技師と共同で、老朽化あるいは故障した医療機器を修理・修繕し、その整備方法について詳細かつ丁寧な指導を行った。 <p>栄養に関する講義・実習</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本の栄養士が、食品の栄養価や食材に適した調理法に関して、食習慣の違いを踏まえて、シーア記念病院の研修生に対して実演と講義を通して指導した。 <p>坐薬の使用・調剤に関する技術交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ネパールでは、痛み止めを注射で投与する方法がとられているが、日本の医療チームは口唇口蓋裂患者には痛み止めを坐薬で投与した。また、日本の薬剤師が、坐薬の調合と形成を実演した。 <p>患者アンケート</p> <ul style="list-style-type: none"> 患者の実情と手術が患者に与える影響を調査するため、あらかじめ用意した質問表を用いて患者アンケート調査実施した。概要と結果は以下。
11 月 24 日	技術交流会を開催 <ul style="list-style-type: none"> カトマンズのホテルホールにて、ネパールで口唇口蓋裂治療を行っている、あるいは関心のある医療従事者を招いて、技術交流会を行った。
11 月 25 日	日本人医療チーム本隊帰国 <ul style="list-style-type: none"> 本隊帰国後も、日本人医療専門家 4 人がスタッフと残り、抜糸手術と回診を継続した。また、手術室と病棟の撤収作業を行った。 来年度まで倉庫で保管するよりも、シーア記念病院にて活用されるほうがよいと判断された医療機器については、製造番号等を記録し、使用上の注意を文書にて提供すると同時に、適切な指導を行い、ADRA Japan の事業での使用を最優先することを約束した。
11 月 28 日	日本人医療専門家有志と事業責任者が事後整理を完了後帰国 <ul style="list-style-type: none"> 医療機器や一部を除く未使用の医療消耗品は全て次回の事業のためシーア記念病院の倉庫に保管した。 開封済みの医療消耗品や、未開封であっても保管に適さないもの、病院側で絶対的に不足している医療品、多くの寄付をいただいてゆとりがある医療品の一部をシーア記念病院に寄贈した。 日本人医療専門家帰国後、最後の患者が 12 月 11 日に帰路につくまで、回診と看護をシーア記念病院の医師・看護師が引き継いだ。

12月～3月	学校・教会・企業に対する本事業の報告を行うことにより、国際協力に対する理解と協力を呼びかけた。
--------	---

14. 患者アンケート調査 前述の通り、本事業実施期間中に患者アンケート調査を実施した。

調査目的: 患者の実情と今回の手術が患者に与える影響を調査するため

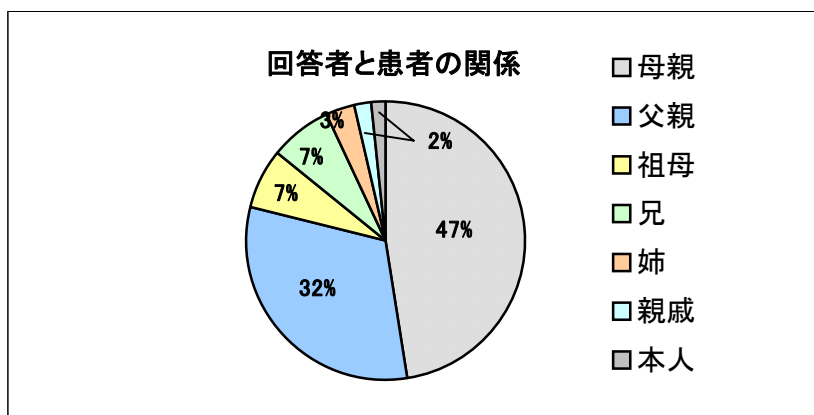
調査方法: 調査は、あらかじめ用意した質問表に基づいたインタビュー形式で実施した。

質問者は ADRA インターン。通訳は Rochan Shakya。

調査事項: 「患者の個人的な情報(宗教や学歴等)」、「患者の今までの人生における口唇口蓋裂の影響」、「手術前後の変化」の3分野

調査対象: 口唇口蓋裂治療手術を受けた患者(調査は手術の翌日に実施)

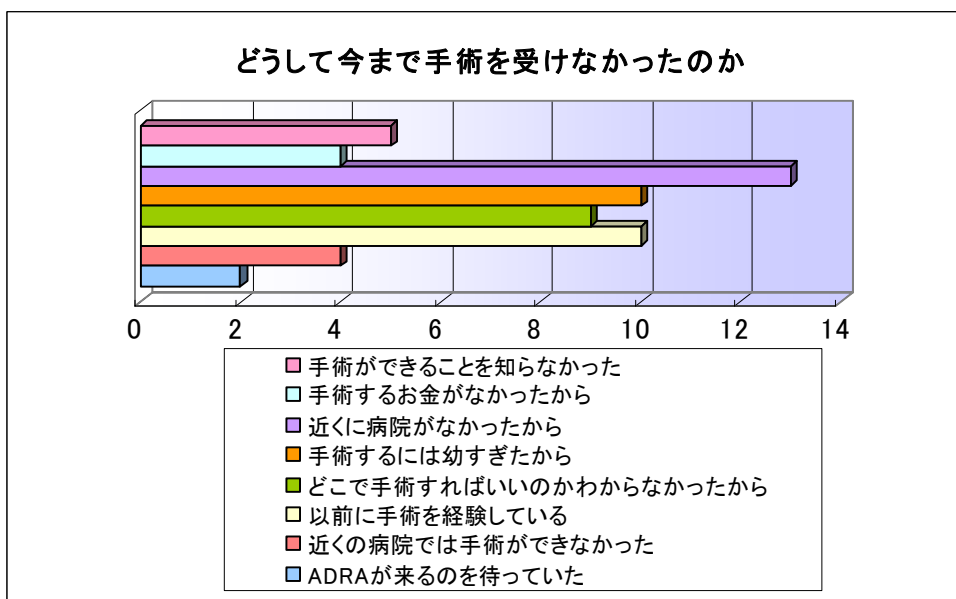
一人を除き患者本人ではなく保護者が回答した。患者と回答者の関係はグラフ1の通り。



グラフ 1 患者と保護者の関係

主な調査結果: (※表中のCLPはCleft Lip and Palate の略で口唇口蓋裂、CLPPは口唇口蓋裂治療のこと)

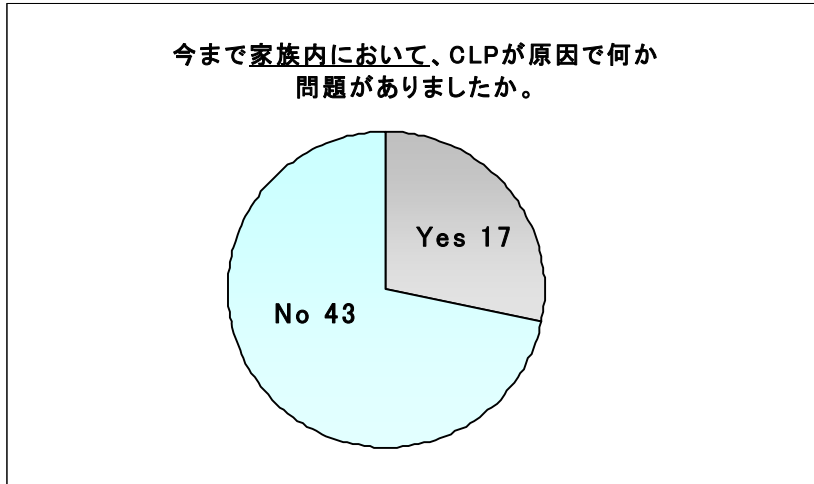
① いままで手術を受けなかった理由



・ この質問に対する回答として最も多かったのが、「近くに病院が無かったから」というものであった。「近くの病院では手術ができなかった」という回答も併せて考慮すると、口唇口蓋裂を治療する技術を持つ病院が、患者の身近にあることは非常に少ないと思われる。

- ・ 以前に一部を手術した経験があり、今回その続きで治療に来たという患者も少なくなかった。その大部分は昨年までの ADRA 事業で手術を受けた患者であった。

② 家庭内における口唇口蓋裂による問題

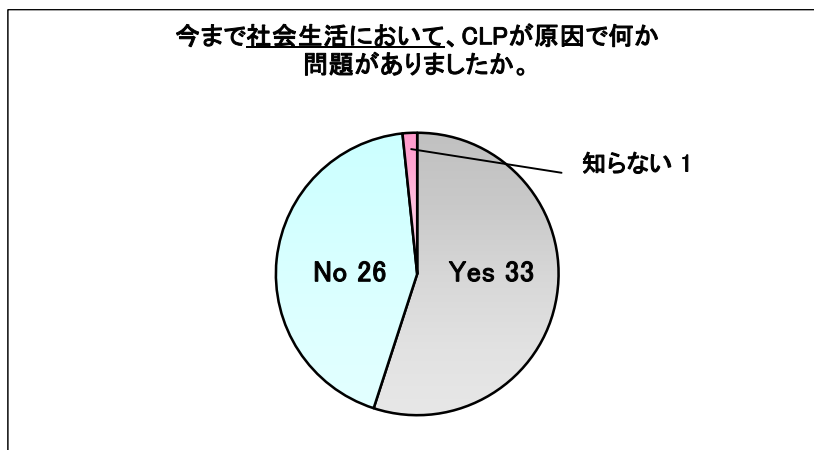


家族内での口唇口蓋裂による問題の例

なぜこんな子が生まれたかという家族の話し合い、もめごと
 父親が知らない女性と家庭から逃げ出した
 父親の両親から母親へのいじめ
 父親の兄弟から母親への不平・不満
 何か神様に悪いことをしたのではないかという話し合い

- ・ 全体的には口唇口蓋裂が原因で家族内で問題を起こしたケースは3分の1にも満たず、多くの家庭では自分の子どもを口唇口蓋裂とは関係なく大切に育てていた。「他の異常のない子どもを見てどう思うか」、という質問に対しても、「自分の子どもが大切だから他の子どものことは関係ない」と答えた保護者もいた。
- ・ 問題が発生したケースをみると、最も多かったのは父親側の親族(主に姑や舅にあたる母親・父親)による患者の母親へのいじめであった。不平や嫌味を言われることもあり、その内容には「妊娠中の行いが悪かった」「前世の報いである」など、宗教的な思想が反映されているケースもあった。

③ 社会生活における口唇口蓋裂による問題

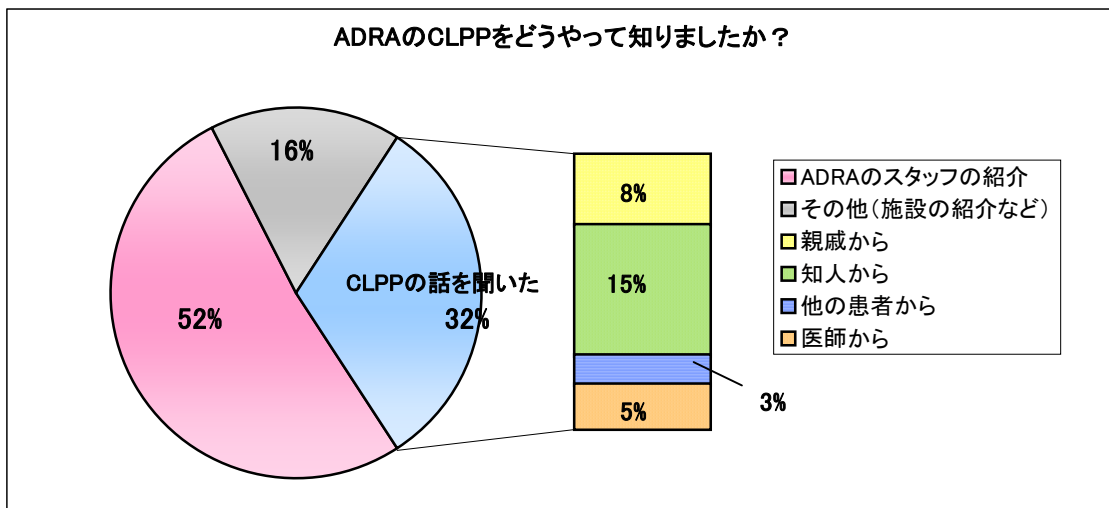


社会生活での口唇口蓋裂による問題の例

周囲の人々からの陰口
 友達から「コレ」(ネパール語で口裂けの意)といじめられる
 いじめられて学校をやめてしまった
 周囲の人々に、親が前世で悪いことをしたのだと言われる
 周囲の人々のつめたい目
 生まれたときに村中で大騒ぎ(その村では口唇口蓋裂の子どもが生まれたのは初めてだった)

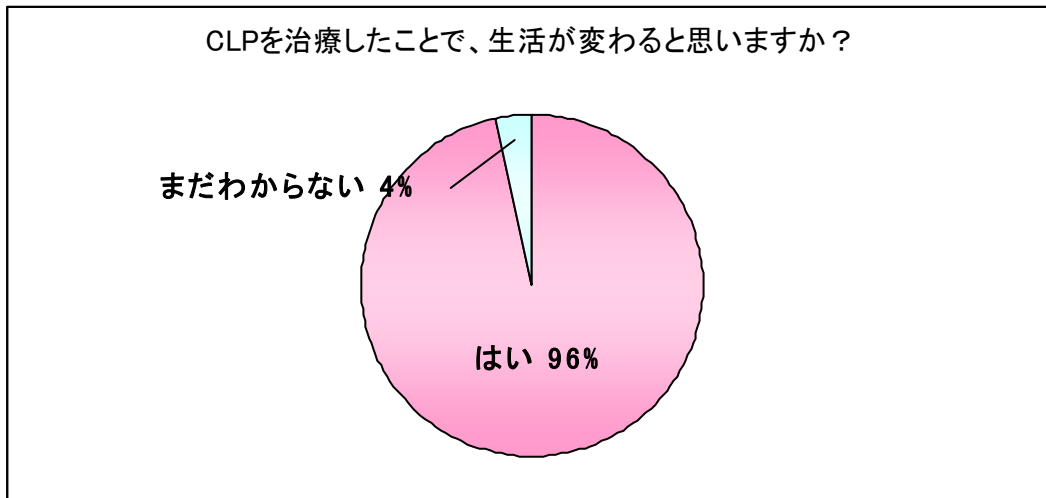
- ・口唇口蓋裂が社会生活において問題を引き起こす割合は、家族内のそれに比べて大幅に上がっている。なお、保護者が患者の学校などの環境における生活の実態を把握していないケースもあった(患者本人が話したがらないという。)
- ・主にどのケースも、口唇口蓋裂という病気に関して周囲の人々の知識・理解が欠落していることが原因の差別で患者が精神的に苦痛を感じている。患者がこどもの場合、いじめのために学校に行けなくなることも多く、それはさらに社会生活での仕事の選択肢を狭めるなど二次災害的な影響を及ぼしかねない。

④ ADRA の口唇口蓋裂手術のことを知った経緯



- ・ ADRA Nepal の医療コーディネーターであるラムさんの紹介により集まった患者が過半数であった。
- ・ 今回の調査で特筆すべきはハンディキャップを持った人たちのための施設の役割である。そうした施設から ADRA の口唇口蓋裂治療の情報を得て集まった患者が 16%と多かった。

⑤ 治療を受けた後の生活について



どのように生活が変わると思いますか
他の子みたいな普通の生活が出来る
人に悪口を言われなくなる
しっかりしゃべれるようになる
キレイになる
もういじめられない
勉強に専念できる
社会生活がうまくいくようになる
学校に行けるようになる

- ・ 口唇口蓋裂の治療を受けたほぼ全員が、生活が変わると思うと答え、具体的な見通しとしては、これまでの生活よりも良い将来を期待する患者(保護者)がほとんどだった。外見的な印象はもとより、発音がはっきりすることによって社会生活にも障害がなくなることが患者本人や保護者にとって、もっとも喜ばしいことのひとつであるといえる。
- ・ 今まで口唇口蓋裂によるいじめのために学校に行けなかった子どもが、今後学校に通い、勉強に専念できるようになることで、その子のもつ可能性をより高めることにもつながるといえる。

15. 評価

【尊厳の回復について】

- ・ 患者アンケートの結果からも伺えるように、手術を受けた患者の社会生活の向上や、社会生活への自信の回復に寄与することが出来たと言える。特に、子どもを抱いて「きれいになったね」と何度も声をかける母親の姿や、顔を合わせる度にうれしそうに微笑む青年の表情からは、この活動の効果が見て取れた。



- 入院期間中、患者や患者の家族は日本の遊び道具(しゃぼん玉、折り紙)を通じて日本人看護師らと楽しい交流の時間を持つことが出来たと喜んだ。



【医療技術交流について】

- 事業中は、特にネパール人手術スタッフの学習意欲と献身さが日本人医療関係者により非常に高く評価された。また、シーア記念病院の医療関係者からは、日本の医療チームの医療に対する厳密さと組織力が評価された。事業終了時には、言葉の壁はあっても、口唇口蓋裂の治療・看護の経験がまだ少ないシーア記念病院の手術室スタッフと看護師は、日本チームから多くの教訓を得たと感謝された。
- ネパールには、医療の先端に通じる医師もいるとはいえ、手術室スタッフや看護師たちに、日本からの技術や知識を移転することの有効性が確認された。
- 鎮痛剤の投薬に坐薬を使用したことは、その薬効と付随する利点が高い評価を得た。また日本の薬剤師が坐薬の効果と生成方法を指導したことは大変好評であった(写真下、左)。ネパールには坐薬の型が普及していないが、坐薬の使用には積極的で、関係者はその生成方法について熱心に質問するなどし、今後、この技術が活用されるようになる見込みは大いにあるといえる。



- 壊れていた、あるいは整備不良で使用できない状態にあった数々の医療機器を、日本の臨床工学技師が現地の技術者を指導しながら修理および整備したことは大変好評だった。病院関係者からも非常に感謝され、今後も日本の技師からより多くを学びたいという要請があった。

【国内啓発について】

- 事業参加の事前事後のアンケート調査の結果から、本事業に参加する前と後では、半数以上が途上国の問題に対する関心が増加したと答え、分野では、教育、子ども、女性、紛争、医療が挙げられた。特に、女性に関する問題に対しては「関心がある」と答えた参加者が倍以上になった。事業期間中に、反政府活動を続けていたグループと政府が和平協定を結んだことや、他の国の

医療チームによる子宮脱の手術が始まったことも影響していると思われる。また、今後、国際協力に何らかの形で関わっていきたいと思うかどうかの質問に対しては、全員がそう思うと回答した。よって、参加者に対する啓発は十分になされたと評価することができる。

【シーア記念病院との新しい協力体制について】

- 本年度の事業は11回目までと異なり、初めてのシーア記念病院との連携事業となった。このため、もともと存在するコミュニケーションの難しさも相まって、事業開始直後は特に、医療現場での混乱が見受けられた。しかし、事業中の中間評価をもとに、両者の努力で早期にしっかりと軌道修正が行われ、調和的な協力体制で、安全な手術と看護を患者に提供することができ、事業終了時の反省会では、協働は成功裏に終わったと確認された。また、医療機関での事業を行うことで、日本の医療チームの滞在後もネパール人スタッフに安心して看護や必要な処置を任せることができ、施設および設備やほとんどの医療消耗品の調達面でも支援を得ることができた。
- 今回は、シーア記念病院の小児科医の協力を得られたことが事業期間全体を通じて、効果を発揮した。ただし、どの患者が小児科を受診中であるか、次の通院はいつか、計画されたとおり手術を行うのかどうかといった情報が効率的に共有できてない事態も発生した。

16. 来年度への申し送り事項

- 術前検診では、検診用の器材の準備、検診の手順や検診の精度に関して、混乱が発生した。2回目となる来年は今回の教訓を生かし、事前に十分な合同オリエンテーションを実施する。
- カルテ様式の改善(医師の記入欄追加、小児科医の記入欄追加、簡略化の余地)を検討する。
- 気温が低下していく季節であるということを考慮に入れ、特に子供の患者の風邪を予防するため、年齢を考慮した手術計画(小児を早い時機に手術する＝待機期間中の風邪などの発症を防ぐ)などを検討する。
- 手術後の皮弁の剥離や瘻孔が開いてしまうケースを最少化するため、食事の種類と抗生剤の使用について再検討する。
- 手術を終えた子供に母乳を与えることの是非を再検討する。
- 術前検診前のオリエンテーションにおいて、口唇口蓋裂という病気とその術式、看護における注意点等をチーム全体で共有できるような活動を取り入れる。
- 患者の年齢と症例によって、予定していた手術件数を上回って治療することが可能になる場合があるが、医師と看護師とが治療と看護のバランスを保ちながら対応できるように、日常的な打ち合わせの場を設ける。また、病床の数や不足物資(毛布、ヒーターなど)に迅速に対応できるように、関係スタッフも同席する。
- シーア記念病院のスタッフから、日本医療チームによる水準の向上を目的とした講習に対する要望があった。それに応え、文化の違いやネパールの医療手法を十分尊重しつつ、技術講習の実施を検討する。
- 再検査となった患者や、手術前に体調を崩した患者の診察日程などを把握し、手術計画の変更などに対して、迅速かつ適切に対応できる人物の病棟への配置を検討する。
- その他、今回の事業実施期間中に随時調整を加えた事項に関して、来年度の事業運営の参考にする。

17. 今後に向けて

患者へのよりよい治療と看護という課題は常に追求すべきものであるが、ADRA Nepal に加え、初めての現地協力相手であるシーア記念病院の協力により、今回の事業は成功裏に終えることができた。事業中に、来年に向

けた課題も話し合い、シーア記念病院における事業のさらなる向上を目指して協働することが関係3者で確認された。このことは、近年のネパールにおける外国 NGO 関連政策の変化に伴い、ADRA Nepal による直接的な医療行為が制限されたこと、そして、現地での口唇口蓋裂治療体制の確立の支援という観点からも、望ましい方向にある。

来年の事業運営のための具体的な取り決めに関して、実務レベルでは双方の合意が形成された。今後、その合意文書を代表レベルで討議し、署名の上、来年度の事業にむけて取り組む予定である。民主化が急激に進みつつあるネパールでは、未だに人心が落ち着きを取り戻しているとは言いがたいが、治安状況は以前より改善したこともあり、安全な事業運営ができたこと、また今後の事業の先行きが見えるようになった。事態が悪化せず、むしろ改善していくことを願っている。このほか、来年の事業に向けた、重大な障害は無い。

今後の事業展開を考える上で、病院における治療だけではなく、より遠方の貧しい患者に手を差し伸べるために巡回医療に移行するべきではないかという意見もあがった。この背景には、病院における治療の機会の拡大があっても、ネパールの遠隔地に暮らす貧しい口唇口蓋裂患者は取り残され、治療を受けることなく一生を終えているという問題がある。

これに対し、ADRA Japan は現時点では、病院との定期的な協働事業による現地での口唇口蓋裂治療技術の定着・発展と確実な医療を重視する方針である。近年、他の団体による地方での巡回医療が活発化し、治療の機会が拡大していることを認識し、歓迎しているが、同時に、それらの巡回医療に複雑な症例の患者や低年齢の患者が取り残される傾向にあることが懸念され、実際、参加した医師は、今年の患者には複雑な症例が多かった、と印象を話した。また、巡回医療の安全性も確実性が低く、きちんとした設備と術後の十分な回診と看護ができて初めて安全で確実な治療を提供できると考えている。また、ADRA Japan は医療を専門とした組織ではないため、日本と現地の医療チームとの協力があってこそこの医療事業を展開できることも考え、今後はシーア記念病院での治療体制の確立を目指し、可能であれば追加的な支援として巡回医療も視野に入れる考えである。

一方、ネパールの口唇口蓋裂患者が治療を受けられない原因として、根本的な貧困という問題は無視できない。山間部や農村地域などに暮らす患者の家族の中にとつて、治療費を独自で賄うのは困難であるのに加え、社会の中で不利な立場に置かれる場合が多い。このために、無料の治療の機会を提供してはいるが、今後、患者とその家族が治療の前後にも自立を支援することも長期的には取り組まなくてはならない課題である。

事業実施団体

ADRA Nepal	責任者 Yvan Castro Tel: +977-11-663704 or 661635 Fax: 661886 http://www.adranepal.org/
シーア記念病院	責任者 Stuart Forbes http://www.scheermemorialhospital.org/
ADRA Japan	責任者 石井 光男 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 1-11-1 Tel: +81-3-5410-0045 Fax: 5474-2042 http://www.adrajpn.org/